

第24回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ①

「かけがえのない出会い」

奥村 英里

岐阜県立岐阜北高等学校 1年



人生で一番濃密な5日間。最高にキラキラした特別な5日間。正直、こんなに幸せな5日間を過ごすことになるとは思っていなかった。ありふれた言葉では綴れない、あまりにも充実しすぎていた5日間は、私の人生を変えた。

そもそもこのキャンプには本当に偶然出会った。選ばれるわけではないと半ばあきらめの気持ちで応募したのに、合格の電話を受けて飛び上がって喜んだのを今でも覚えている。参加が決定してからの1か月は事前説明会に参加したり、荷物の準備や韓国語の勉強をこなしたりしているうちにめまぐるしく過ぎた。もちろん期待でいっぱいだったが、日本人学生のLINEグループでみんなが自己紹介で書いている高校名がどれも名門で、場違いなところに来てしまったのかと不安も大きくなった。

そんなぐるぐるした気持ちを抱えて羽田を発ったのが7月24日。そこから日本に帰ってくるまで、本当に一瞬だった。あっという間に感じたのは、きっと何もかもに全

力で取り組んだから。いつも一生懸命な仲間と一緒にいたから、だと思ふ。今では生涯の友人になった大切な仲間に、数え切れないほどの刺激をもらった。

そんな刺激的な毎日の中で、わたしが学んだことは何か。もちろん韓国語も覚えたし、英語で会話するのにも慣れた。経済についての知識も増えた。しかし、この5日間の本当の財産はそういったことではない気がしている。もっと大切な、「心で伝える」という事に気付けたからだ。

このキャンプに参加するまで、「言語の壁」なんて意識したことがなかった。しかし、韓国の学生との初めての共同作業でチームボードを作った時、それを痛感させられた。日本語でなら何も不自由なく説明できることが、英語で説明するとなると時間がかかる。また、どうしても英語にできないときは通訳してもらわなければならない。直球で伝えられないから生じる時間のロスや、生まれてしまう温度差が「言語の壁」の正体なのかと思った。

事業案をまとめている間にも、何度も言語の壁に突き当たった。お互いがお互いの言語だけで話を進めると、どうしても日本側と韓国側で話の論点がずれてしまう。メンターさんに通訳してもらって、何回も話を軌道修正した。相手の言語を完璧に習得しない限り、壁を崩すことはできないという現実を思い知らされて切なかった。

しかし何度もぶつかり合っていくうちに、壁は崩せなくても乗り越えられると、お互いに手を差し伸べれば壁を乗り越えられると、気付いた。同じチームに帰国子女が何人もいたこともあって、基本、チーム内の意思疎通は英語だった。でも、英語で言えなくても、目を見てボディランゲージを使って伝えようとするれば、言いたいことは伝えられる。韓国語で話されても、目を見て聞こうとするれば伝わる。チーム七味のみんなはいつも一生懸命に伝えよう、聞こうとしていた。その姿を見て、自分も「心」を使って伝えよう、聞こうとするれば分かり合えると気付いた。言語はツールでしかない。「なに」で伝えるかじゃなく、「なぜ」伝えるのかさえ見失わなければ、人間同士分かり合える。そんな風を感じた。

噂には聞いていたけれど、キャンプ中 5 日間、まともに寝られた日はなかった。特に 3 日目の夜は、事業発表のためにほとんど徹夜した。ただ、それは全く苦痛ではなかった。全員で協力し、1 つの物を作り上げようとしていた私たちは最高に輝いていたと思う。3 日目の夜、みんなで 1 つの部屋に集まって作業をしている時の動画を撮

っているのだが、眠そうだけれどいきいきしたチームメイトたちの姿がしっかりと映っている。4 日目の夜は、本当にお世話になったメンターのソラさんにサプライズパーティーをし、トランプをし、語り合った。アドレナリンが出まくっていた私が布団に入ったのは、5 時 20 分を回ったころだった。

事業発表に関しては、正直まだ悔しさが残っている。ゆうきとかけるが何テイクもやり直し、ややこが夜を徹して編集してくれたショートムービーが、機械の不調で流せなかった。結果はチームワーク賞。大賞を狙っていただけに、表彰式の後にはみんな無言になっていた。ただ、今考えてみると、これだけ仲のいいチーム 7 だもの。チームワーク賞は私たちにぴったりじゃないかと思える。今もグループ LINE の通知はやまない。みんなのアイコンはサプライズパーティーで撮った集合写真。心で伝えあった仲間とは、今も心でつながっている。

4 日目の夜、写真のスライドショーを見た時から涙腺は緩み始めていたけれど、最後の日の別れの時は号泣した。もう言葉はいらなかった。そこにいたのは、日本人と韓国人ではなく、ただの高校生 10 人、最高の仲間だった。また絶対に会おうと、日本語や英語や韓国語で何回も言い合った。最終日は 40 分しか寝ていなかった。おまけに激辛キムチを食べたせいで喉がおかしくなっていた。でもそんなことどうでもよかった。むしろそれさえも、本当に幸せだった。日本に帰りたくなかった。時間よ止まれと、

本気で願った。とにかくみんなと離れたくなかった。

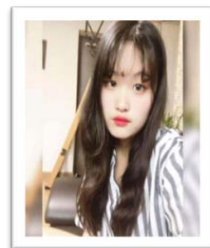
空港についても飛行機に乗っても、帰路について新幹線に乗っても、終始涙は止まらないまま。涙している時間の長さが、このキャンプが自分の中でどれだけ大切な日々になったのかを、改めて知らしめるような気がした。満足感と充実感で胸がいっぱいで、ただ幸せで、ただ切なかった。こんな気持ちになるのは人生ではじめてだった。「ああ、私の人生変わったのかもしれないな。」と思った。

日本に帰って少しずつ日常が戻りつつある今、ふとした瞬間に思う。「みんなのこと

が大好きだなあ。」と。24期生のみんなに出会えてよかった。また絶対に、笑って会おうね。それまでもっと頑張るから。ここで出会った最高の仲間とかけがえのない出会い、心から誇りに思える。

最後になりますが、日韓経済協会の方、JKSFFの先輩方、カメラマンさん、メンターさん、スタッフさん、このキャンプにかかわってくださった全ての方と、温かく送り出してくれた両親、そしてなによりも、かけがえのない日韓両国の仲間に、心から感謝しています。本当に本当に本当に、ありがとうございます。

「ALL LAUGH, 今度会ったら雪だるま作ろう」



孫 辰河 (ソン・ジナ)
明德外国語高等学校 2年

第24回日韓高校生交流キャンプは、キャンプが終わり1週間経った今も私の頭の中に鮮やかな記憶として残っている。部屋は何階の何号室だったのか、誰がどの役割を務めていたのか、さらには誰がどの位置にどのような姿勢で座っていたのかまで目を閉じれば頭の中に鮮明に描かれる。

私は一年間もこのキャンプを指折り数えながら待っていた。第24回日韓高校生交流キャンプの合格者リストを学校の寮で密かにパソコンで確認し、合格者の中に自分の名前があることを確認して、寝ていたルームメートを起こして自慢した。

去年は事情があって、書き込んだ申込書を提出することができなかった。そのキャンプに参加した友達からキャンプの話を開

いた瞬間から、私はこのキャンプに参加したいと思い始め、それからずっと私がこのキャンプへの参加を待ち侘びてきたことを知っているルームメートは寝ぼけながらも一緒に喜んでお祝いをしてくれた。

私は小さい頃からあまり人見知りをする性格ではないが、誰もがぎこちない状態だったので、私もついぎこちなくなって携帯電話ばかりいじっていた。しかし、いずれみんな仲良くなるんだから、とメンターさんに言われ、勇気を出してみんなに声をかけ、すぐに打ち解けることができた。韓国の学生とは言葉が通じるからか、すぐに親しくなれたけれど、日本の学生の前では何を言えばいいのか分からず、茫然としてしまった。共通の関心事を作ってみようと参加前に、日本の芸能ニュースやドラマも見ておいたが、結局それについては一言も話しかけることができなかった。

会場では、私もそうだったが、会話が続きすぎこちない空気が流れていた。それから、私たちは気まずい状態のまま、宿泊する部屋へ移動した。部屋でおやつを取り出して、お互い気になっていた韓国と日本の高校生活について話し始めると、メンターさんたちが言っていた通り、すぐに打ち解けることができた。結局、おしゃべりは朝2時まで続いて、その翌日からはすっかり親友のように楽しく話し合う仲になっていた。

二日目は、経済現場体験に出かけた。気まずかった初日とは違って、みんなと気楽に話し合うことができた。経済現場体験ではチームメート全員が真剣に説明を聞き、より良いアイデアを出すためにバスに戻るたびに聞いた内容について話し合った。そして経済現場体験からキャンプ会場に戻ってきてからは、現場で聞いた内容をまとめて最終的にチームの事業アイテムを決めた。言葉の壁は私たちが想像していた以上に高くて陰しかった。お互いに言葉が通じないせいで、最初はなかなか活発な話し合いができなかったけれど、最終的に私たちは、些細なところ一つ一つまでを話し合いを通して決めていくことにした。このような過程を通して、私たちはお互いが何を言いたいかを少しずつ理解できるようになっていった。またこの過程は、私たちにお互いに対する理解と、事業案を具体化していくチャンスをくれたが、同時に時間に追われてしまう、という課題を残してくれた。

時間に追われていたせいか三日目は、本当にみんな微動だにせずに席に座ったまま、ひたすら事業案について話し合った。和気藹々と話していた二日目とは違って、みんなとても真剣だったが、人数が多いせいか意見が一致しない場合が増えてきた。また、みんな言葉がうまく通じないことにもどかしさと焦りを感じ始めていた。長時間座りっぱなしのせいか、身体はクタクタに疲れ、休まずに話していて声は掠れてきた。しかし、そんな状況下でも誰一人イライラせず

に、お互いを配慮し合っていたチームメートたちの姿がいまだに記憶に残っている。

うちのチームの最大の強みは、本当にお互いの話を真剣に聞いてあげるところだったと思う。私の場合、まずたくさんのアイデアを出しておいて、その中からいくつか良いものを選択するタイプなのに、私が出した全ての意見に対して慎重に悩んで、その意見全てを取り入れようとしてくれたチームメートたちがとてもありがたかった。

だが、このような強みは時間を食うという欠点を伴い、結局、私たちは徹夜をすることになってしまった。試験勉強ではなく他の活動で夜を明かしたのは初めてだったし、一人ではなく友達と一緒に徹夜したのも初めてだったのでやるのが山ほどあって忙しくて目が回るくらいだったが、みんなと一緒にだと思えばなぜか楽しく感じられた。私にとって徹夜は珍しいことでもなかったし、夜型人間だったのでどうってことなかったが、日本の友達には本当につらそうだった。眠そうな目をこすりながらも最後まで頑張ってくれたし、申し訳なさそうにごめんと謝りながら眠りに落ちていった。

日本の友達が夜遅くまで一生懸命に台本を書いてくれて、私はそれを翻訳した。しかし、普段漢字をあまり使わない私には、彼らが書いてくれた漢字を読むのが本当に難しかったし、知らない単語も多かった。そんな私の為には、自分の役割もあって忙しいにもかかわらず、私が理解できるように分かりやすく説明してくれた。大きさではなく、今まで学校で習ってきた日本語の単語よりこの日に学んだ単語の数がは

るかに多く、断然実用的であったと断言できる。

徹夜までしたが、結局、時間が足りなく台本を完成することができず、発表の半分以上をアドリブでつなぐしかない状況になってしまった。しかし、発表の時、私たちは誰よりも最善を尽くして、私たちが伝えようとしていた内容を全て披露してから発表を終えることができた。その瞬間、心残りも多々あったけれど、チームメートたちと一緒に全力を尽せたことに、人生で最高に楽しい発表ができたと言い切れる気がした。

審査の結果は3位だったが、賞品も気に入ったし、チームメートたちもミスなく無事に発表を終えたことを大いに喜んでいた。

発表時間が予定より大幅に延びてしまい、みんなクタクタになっていた。しかし、発表が終わった瞬間から、私たちは翌日には家に帰らなければならないという実感が湧いてきて、徹夜して疲れていたにもかかわらず精一杯楽しい時間を過ごそうと頑張った。

複雑な気持ちだったけれど、みんなで楽しんだミニ・オリンピック大会とバーベキューの後、私たちは事業案ではなく、お互いのプライベートについて本音で話し合った。この時間に私たちは互いのことについてたくさん理解することができたし、この時間のおかげで、私たちは今でもお互いに連絡を取り合い続けている。

最終の夜、私たちは本当に仲の良い友達になり、絶対泣くまいと決めていた別れの瞬間、号泣してしまった。最後の日は間違いなくみんな泣くからね、と言っていたメンターさんの言葉通りに、まさかこんなに短期間にそこまで仲良くなれるかな、と疑っていた私だったのに、結局一番泣いた人の一人になってしまった。

短い期間だったが、このキャンプを通して本当に多くのことを学んだし、思考の転換点となった。また、私を一回り大きく成長できた気がする。このキャンプの期間中、ずっと日本語を使っていたので、日本語の実力もぐんと上がったと思うが、何よりも良かったのは、私がどれだけ他人への配慮が不足していたのかについて、考え直してみる良いきっかけになったことだ。日本の友達は朝起きた瞬間から夜眠りに落ちる瞬間まで、全ての行動一つ一つに他人への配慮が自然に醸し出されているように思えた。韓国であれば、礼儀正しいね、と褒められそうな行動も、彼らにとってはただの日常の一部に過ぎなかった。また、「ごめんね」、「ありがとうね」のような挨拶をさらりと言える姿が、私には新鮮なショックとして残っていて、彼らを見習って私も日常的に挨拶ができるように努力している。

また、このキャンプから帰ってきてからは、日本の友達が目指している大学と私が

目指している大学の間で交換留学ができるという事実を知り、より一層勉強に励むようになった。キャンプに参加する前は、スランプに陥って勉強をおろそかにしていた私を心配していた母も、このキャンプから帰ってきて猛勉強している私を見て、本当にキャンプに行かせて良かったと喜んでくれる。ターニングポイントと言えれば少し大きさに聞こえるかもしれないが、私にとっては、スランプから抜け出す活力の源になった、かけがえのない貴重な経験となった。

最後に、このキャンプで出会った全ての方々へ感謝の言葉を贈りたい。このような素敵な機会を提供してくれた主催側スタッフのみなさん、事業企画の際にヒントをくれたり笑顔でキャンプを運営してくれた運営スタッフのみなさん、キャンプを楽しませてくれたり作業を手伝ってくれたパットさんとマットさん、うちのチームのお笑い担当だった、チームの長女のナヨンさん、年上だけど友達のように親しく接してくれたヒョンジンさん、うちのチームの可愛い担当のミナちゃん、苦楽を共にしたチーム1のチームメートのみんな！楽しい時間、最高の経験、忘れられない思い出を、本当にありがとう！すぐにでも会いたいけれど、大人になったら真っ先に会いに行くからね。大好きだよ。

「ALL LAUGH」



中谷 亮太
稲毛高等学校 2年

今回のキャンプは初めてなことだらけのキャンプだった。はじめ学校で今回のキャンプについてのポスターを見たとき、応募してみようかとも悩んだ。それまでは自分に自信が持てなくて、このような活動は全部スルーしてきた。しかし、このチャンスを逃すと、一生後悔するのではないかと思ひ、行けなくてもいいから挑戦してみようと思ひ、初めて自分から先生に声をかけた。まさか行けることになるなんて思ってもいなかった僕は、合格通知の電話が来たときに声が震えてうまく話せなかったのを覚えている。

初日、韓国のホテルにつき、韓国の学生と初めて顔を合わせたとき、互いになにをしていいかわからず、ただニコニコしていた。自己紹介をして、軽いオリエンテーションをしてから、初日は終わった。

2日目には、事業所体験で、オリンピックの競技場の一部を見学した。2日目からは互いに緊張もほぐれてきて、段々と話せるようになってきた。簡単な遊びをしたり、スポーツの話や、アイドルの話をしたりした。

2日目の夜から発表案について本格的に

話し始めた。韓国と日本、それぞれ文化的背景や価値観の違いから、様々な案が出た。今まで外国人との交流を持ってこなかった僕にとって、やる事全てが新鮮で、些細なことがとても楽しかった。

3日目から、発表の準備に入った。学校でも似たようなことをやってきたが、今まで他力本願で人任せだった僕がこの日は違った。話し合いでも自分の意見を出し、自分の仕事を全うした。「俺にもこんな能力があったのか。」我ながら驚いた。今まで自分に自信が持てなかった僕だったが、この時初めて自分に自信が持てた。

この日は発表準備が終わらず、徹夜で準備した。正直なところ、ものすごくしんどかった。丸1日寝なかったのは初めてだったし、1日中頭を働かせていたので朝方の4時ごろにはもう頭が回らなくなっていた。しかし、一緒に準備をしていた班のメンバーが頑張っているのを見て、なんとか僕も準備をやり遂げることができた。

4日目、発表本番をむかえた。他の班のクオリティの高さに圧倒されながらも、できる限りの力を出し切った。完璧な発表とはいかなかったけど、最高の発表になった。

僕たちの班の結果は、優秀賞だった。結果が発表されたときは、自分達の努力が報われた気がして、とても嬉しかった。このとき一緒に支え合った仲間にはいまだに感謝しているし、尊敬している。

4日目の夜も寝ずに最後の夜をメンバー全員で過ごした。日本に帰りたくないな、ずっとこのメンバーと一緒にいたいな、そんなことを思っていた。

最終日、空港近くのレストランで昼食を食べた後、とうとう別れの時が来た。泣いているメンバーを見ると、5日間の思い出が蘇ってきて、僕まで泣きそうになったが何とか堪え、メンバー全員と堅い握手を交わし、再開を誓った。

今回のキャンプでは、得た物しかなかった。初めての体験ばかりで応募したときからしばらく気持ちが落ち着かなかったが、勇気を出して応募して本当によかったと思っている。初めてできた他の都道府県の友達、初めてできた外国の友達、初めてした体験の数々、全てが僕の宝物になった。

僕は今でも時々キャンプの写真を眺めて思い出に浸っている。いまだにキャンプの余韻から抜け出せない。それほど今回のキャンプで過ごした5日間は内容が濃く、今まで生きてきた中で一番充実していた。別れ際にみんなとまた会う約束をした。その日が楽しみでしかたがない。最高の思い出をありがとう。

